

農家の階層的な変動について

―長野県伊那市農家の変貌―

大須 真治

一九七七、七九年に中央大学経済研究所のプロジェクト研究の一つとして、長野県伊那市の二つの農業集落について農家実態調査を実施した。その後一九八九年に同じ二つの農業集落について再度実態調査を行ない、この間の農家の変化を階層的に分析することとした。

長野県伊那地域は、諏訪・岡谷を中心に展開している電機・精密機械工業がいろいろな形態で農村のすみずみにまで浸透してきているところである。われわれの研究テーマはこのような「農村工業化」

の地域で農家の農業経営や就業の構造、そして農家生活の仕組みはどのようになっており、それほどどのように変貌してきているかを解明し、そこから今日の農家、特に兼業農家が抱えている経済的な問題点が何であるかを究明しようとするものであった。

調査研究の方で重視した点は、農家を世帯として捉え、階層的に分類し、変化を跡づけることであつた。これについてすでに『研究通信』No.一六五で、そのあらましについてふれてあるのでそれを参照していただくことにするが、簡単に言うとき大きな分類としては農家をA、Bの二つに類型化した。この分類には農家としての農業あるいは兼業への従事の程度、および世帯の形態、世代間での農業・兼業への従事の程度の差等が考慮されている。

具体的にはA型農家は米プラスαの農業経営が行なわれ、農業就業者の確保も一定程度行なわれており、農業経営の展開によって生活の安定がはかられる可能性を保持している農家である。これに対してB型農家は農業経営は米のみとなっており、世帯員のほとんどが兼業従事になっている農家である。

以上の分析方法によって二つの集落の一〇年間の変化を見てみる。一つの集落ではAI農家（A型農家のうちで第二世代が兼業就業になっている農家）の壊滅的な減少が見られたが、もう一つの集落ではA型農家数はほぼ維持され、AI農家は増加さえしている。しかもこの集落ではB型農家からA型農家へ移行した農家も見られた。

本報告の課題は、この二つの集落の動向のちがいを全国的な兼業化、あるいは農業危機の深化という事態のなかでどのような意味を持つものとして把握すべきであるかということでもある。

その接近方法として、第一に一〇年間の農家変動を主に労働力の

視点から整理する。そしてさらに第二にB型農家からA型農家へ移行した農家の事例研究を行なうことである。それによって移行を可能にした条件は何であつたのか、その条件はより一般化できるものなのか、より特殊・個別的なものなのかを確定することができるであろう。

以上によって二つの集落の動向の持つ意味のちがいが解明されれば、それによって「農家経営」再建の施策をつくりあげるための具体的な糸口を見つけ出すこともあながち不可能ともいえないであろう。

（中央大学）